詩雑誌「学校」研究(一)：「銅鑼」から「学校」へ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1988-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉浦, 静 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1554

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

詩雑誌「学校」研究(一)

――「銅鑼」から「学校」へ――

杉浦　静

本稿は、詩雑誌「学校」の詩史的位置付けの準備作業として、創刊までの経緯を概観したうえで、全七冊の内容を各号毎に紹介・検討するものである。テキストには大妻女子大学図書館蔵本を用い、適宜、日本近代文学館蔵の複写（コピー）版を参照する。「学校」はこれまで、稀覯雑誌として知られ、その作品の一部は、伊藤信吉『逆流の中の歌―詩的アナキズムの回想―』（昭五二・泰流社）に引用紹介されたこともあったが、収録作品の全貌は未だ広く知られることがなかった。以下、作品の引用にあたってはできる限り、全文を掲げ、必要に応じてのちの詩集収録形との異同を付記することにする。

なお、本稿は、第一号(創刊号)までの紹介にとどまり、二号以下は次回の紹介になることをあらかじめお詫びしておきたい。

1　「学校」前史―「銅鑼」終刊まで

大正一四年（一九二五）四月に中華民国広州で創刊され、第三号以来、日本に於いて刊行されて来た「銅鑼」が、「第二次銅鑼」として再「出発」したのは、昭和二年（一九二七）二月刊の第十号（編輯者　手塚武）であった。第十号は次

のような一節を含む「巻頭言」を掲げている。

われ等何を為す可きであるか―此決定された問題の前に即ち挙止札(ママ)をする。

われ等は出発当初の精神よりして、友愛的結合に依りて、同人相互の扶助的精神に依りて成立する団体にして、政治的意識の下に構成されしものに非ず、故に思想的乃至は観念的相異よりして分裂することなく、自由主張と自由合意の精神の下に、一致協力常にエゴ！の核心に立ち、より偉大に依って烙印されし世界感情に依って、新しき実在の探求及び創造を期す。

創刊以来初めての「巻頭言」の掲出であった。創刊以来の雑誌の理念が「扶助的精神」「自由主張と自由合意の精神」に基く個（エゴ）の結合にあったと把え返し、さらなる前進を呼びかけた。このような動きの遠因には、日本プロレタリア文芸聯盟のアナーキズム・マルキシズムの二つの立場への分裂（大正一五年十一月）以来のアナ・ボル対立があり、近因としては、「銅鑼」同人のなかのアナーキズム系の詩人の抬頭、それに対立する赤木健介と、いわば主流というべき手塚武の論争（八・九号）が展開されるなど、「銅鑼」内部に〈政治性〉をめぐる混乱の予兆があったことがあげられよう。この「巻頭言」は、その「相互扶助」「自由合意の精神」などの、掲げた理念に見られる通り、明確にアナ系の集団であることを宣言したものであった。以後、この傾向は、加速的に雑誌の〈政治色〉を強めていった。たとえば、「無産階級詩人の立場から」（小野十三郎・第十一号）、「何が『観念的』であるか―アナーキズム戦線内に於ける唯物弁証論者への質疑」（岡本潤・第十三号）「行動原理の確立へ」（手塚武・第十四号）等の評論や、「B・H・Sとは何か、そして何を欲してゐるか？」（ピエル・ラムス、土方定一訳・第十三号）「エリゼ・ルクリュへのバクーニンの手紙の断片―一八七五年二月十五日」（土方定一訳、M・ネットラウ訳註・第十四号）「クロポトキンの追憶に」（ロバート・ボタンツキー・ダントン、土方定一訳　第十六号）「社会民主主義とアナーキズム」（ロドルフロッカー、土方定一訳・第十六号）「革命を

圧服した力」（エムマ・ゴールドマン、神谷暢訳・第十六号）などの翻訳が続々と掲載されたところに、〈政治性〉への傾斜が見られるのである。

「銅鑼」は結果として第十六号（昭三・六）で終刊した。その編輯発行人は寺田鄭（土方定一）、銅鑼社の住所も土方宅であった。それまで第十号以外のすべての号に、編集又は発行人として、名を掲げていた草野心平は、後記に「▲草野心平君、当分住所不定、郵便物一切は東京市外原宿一七〇」と記されるように、この号では編集実務から遠ざかっていた。「後記」には、新同人の加入や、新支社設置の報告がなされ、さらに「本号は稍々翻訳の多きに失したが、来月号はより多く創作を載せてゆかうと、同人一同がんばってゐる。」と書かれるなど、終刊を予測させる文言はない。雑誌の内容は、翻訳が多かったと反省されるように、アナーキズムの評論・翻訳が量として他を圧倒するものとなっており、アナーキズム運動誌の性格が押し出されていた。

ところで、草野心平は、「銅鑼」の終刊の経緯について、三種類の回想を書いている。

「『銅鑼』に就いての私的回想」[注1]では、

第十六号の後記「草野心平君、当分住所不足」とあるが、その年の五月私は二度目の新潟に行きそれから単身佐渡に渡った。／帰京した私は結婚したが、無職の私は東京を食いつめ、（それはまるで偶然の機会によってだったが、）前橋に落ちのび、約二年間前橋に住んだ。／寺田鄭の土方定一とは「テアトルクララ」を一緒にやったりしたが、矢張り多分その同じ昭和三年の何月かにドイツに発っていった。「銅鑼」終焉の直接の原因は私の東京離れと土方の日本離れにあったようにも思う。

この後に「同人間の思想的傾向」には触れなかったと書いているのだが、ここでは物理的原因、つまり、根拠地（東京）の喪失と中核・実務の人物の離散に廃刊の原因が求められている。

これ以前に書かれた「わが青春の記」[注2]では、

「銅鑼」は十六号で終刊した。土方定一のマルキシズムへの傾斜とドイツ行き、私の前橋落ちその他が原因だった。

と、土方定一の「マルキシズムへの傾斜」という思想的原因も指摘されている。

さらにそれ以前の回想「わが詩歴」[注4]では、

内部に於ける三四の同人の思想的対立から「銅鑼」は終刊することになった。

と書かれ、具体的個人名には触れずに、終刊の原因を思想的対立に求めているのである。

ここに言うような同人間の思想的対立は、第八・九号の赤木健介と手塚武の論争にも見られ、その際は第十号から「第二次銅鑼」として再出発することで、終刊の危機は越えたのだが、十六号の際は、終刊を余儀なくされる程深刻だったということなのだろうか。いま、当時の同人間の思想的対立を具体的に検証する準備はないので、これ以上触れられない。

ここでは、「前橋落ち」に帰結する草野心平の「銅鑼」との係わりの変化から、終刊の一側面を推測しておきたい。

草野心平は、「銅鑼」第十号、即ち「第二次銅鑼」出発直前の新湯行について、次のように回想している。

その頃の「銅鑼」はだんだんアナキスチックな傾向をおびてきた。同人のなかの数人が思想的にそのように傾斜してきたので、それはまず当然のことであったが、(三好十郎はマルキシズムに傾倒し、「銅鑼」をぬけて「アクション」という雑誌を上野壮夫などとはじめた)東京へ帰った私にある日、父は当局へ訴えるといい出した。どこかで誰かに、私が無政府主義者(アナキスト)だときいたからであったようだ。そうしたことを父はやりかねないと思ったらしい母は、しばらくどっかへ行っていた方がいいと私に暗示した。私は母から旅費などをもらって家を出た。(中略)(しかしながら私は、父が噂としてきいたようなレッキとした無政府主義者ではなく、アナキスチックであったことだけはたしかな程度の、いわばアナキズムのアウトサイダーだけのものだった。)」(『わが青春の記』)

ここに回想されるように、「銅鑼」が急速に「アナキスチックな傾向」を帯びてきたのは、第七号(大一五・八)に岡本潤、小野十三郎、手塚武、土方定一らが同人として参加して以来のことであり、草野心平が新潟に行っている間に編集

された第十号(昭二・二)でその傾向は決定的になった。それ以降誌面は、アナーキズム文学運動の性格を明確にするようになっていった。しかし、それとともに、草野心平は、「銅鑼」の中心から、幾分退いていったのではないか。十号以後の目立った変化としては次の三点が挙げられる。編集後記には、「(て)」(第十号)、「(編輯、土方、草野)」(第十一号)「(神谷)」(第十四号)、など草野心平以外の名が現われるようになり、十号以前の単独編集が変化したことがうかがえる。また、草野心平自身の詩の掲載が、極端に減少している。一号から九号まで三一篇の詩が掲載されたのに対して、十号以後わずか四篇しか掲載されていない。訳詩(サンドバアグ)、評論の翻訳を合わせても、七篇にしかならないのである。さらには十号以後で草野心平が、単独で編集したと考えられる、十二号と十五号が、誌面に他の五冊と極立った違いを見せている点も注目される。すなわち、十二号には十三篇の詩のみの掲載であり、十五号掲載の二篇の評論も、それぞれ、フランシスコ・フェラアの「子供の天真性に就いて—「現代学校の起源と理想」第十五章」(草野心平訳)、麻生義「プロレタリア詩の新しき方向」であって、いわば〈文学的〉傾きの強いものであった。

これらの草野心平以外の人間の編集への参加、草野自身の寄稿の減少、編輯人による誌面の性格の相違は、そのまま、「銅鑼」に対する草野心平と、土方定一・手塚武ら、および岡本潤・小野十三郎らとの位置付けの異なりを示すものであろう。草野心平は、創刊以来の同志的結合による、詩の、〈文学〉の雑誌を持続させようとしていたのに対し、他の同人は、アナキズム文学運動の場としてより〈政治的〉に位置付けようとしていたと考えてよいのではないか。この異和が拡大していった時に、十号以降の実質的中心であった土方定一のアナーキズムからマルキシズムへの傾斜も重なり、「銅鑼」は終刊を余義なくされたのであった。[注4]

2　「学校」創刊

草野心平は昭和三年（一九二八）九月、前橋に転居したのち、同年十一月には詩集『第百階級』を出版し、翌月に「学校」を創刊した。先に引いた『わが青春の記』では、「銅鑼」の終刊に続けて、次のように創刊の頃を回想していた。

「銅鑼」は十六号で終刊した。土方定一のマルキシズムへの傾斜とドイツ行き、私の前橋行きその他が原因だった。そこで私は再出発を考え、ガリ版の詩誌「学校」をはじめた。前橋裁判所に小説を書いていた杉田謙作がいたので、そこの謄写版を借りて横地と二人、ちょうどクリスマスの昼と夜とにわたってつくりあげた。表紙は七夕紙の赤、私の書いた字を木版にしてそれに墨をつけて押した。

「銅鑼」のアナキズムへの傾斜と、それへの異和、さらに父親との確執、就職の不如意が重なっていたところへの、坂本七郎・横地正次郎（尚）からの慫慂[注5]が、前橋行きの動因になったわけだが、前橋での「再出発」に期したのは、どのような雑誌を作ることだったのか。まず、「学校」全七号の概要と性格をおさえておこう。

創刊号は、昭和三年（一九二八）十二月発行。終刊は、昭和四年（一九二九）十月発行である。ほぼ一年にわたって、七冊が刊行された。創刊号から第五号までは月一冊のペースであったが、六・七号はやや間隔があいた。全冊謄写版刷り。頁数は平均二三頁弱であり、「第二」「馬」「弾道」などの他のアナーキズム系雑誌や、「銅鑼」とほぼ同じボリュームであるが、ほぼ同時期に創刊された「詩と詩論」の三〇〇頁近い厚さと比べると小さな雑誌であった。（表一）

寄稿者数は、創刊号五名、第二号十名であるが、以後、毎号ほぼ十五名前後である。表二は、「学校」寄稿者たちの他のアナキズム系雑誌・アンソロジーへの寄稿の様子をまとめたものである。同じアナキズム系でも、それぞれの雑誌の性格は異なるのだが、それをこえて互いに交流する様子が見てとれよう。秋山清はその辺の事情を、

表一

号数	印刷年月日	発行年月日	印刷者	編集者	発行者	〔学校社〕所在地	頁数
創刊号	一九二八・十二・二十五	〔同上〕	横地正次郎	草野　心平	草野　心平	前橋市神明町五十四	一二
第二号	昭和四年一月二十八日	二月一日	草野　心平	北山　癌蔵	横地正次郎	前橋市神明町五十四	一八
第三号	昭和四年二月十七日	三月一日	伊藤　信吉	北山　癌蔵	横地正次郎	前橋市神明町五四	三四
第四号	（なし）	昭和四年四月	伊藤　信吉	草野　心平	横地正次郎	上州前橋市神明町五四	三三
第五号	一九二九・五・一	一九二九・五・五	伊藤　信吉	草野　心平	横地正次郎	前橋市神明町六十九	二四
第六号	（なし）	一九二九・七・十	伊藤　信吉 横地正次郎	伊藤　信吉 横地正次郎	伊藤　信吉 横地正次郎	東京市外渋谷町神南八 市川方	二二
第七号	一九二九・九・二十日	十月一日	（なし）	（なし）	（なし）	前橋市紅雲町五十六	二二

註1　頁数は、表紙を除いて数えた。表中「（なし）」とあるのは、記載の無い個所。
2　創刊号の日付は、『わが青春の記』（昭四〇・六）によれば、印刷・発行の日付であるが、奥付には、日付のみ記載されている。
3　創刊号には、『銅鑼訳詩集』「銅鑼社刊行書目」の広告頁一頁が添付された版もある。
4　第六号には、謄写印刷の奥付の右隣にペンで発行者の書き添えられたものがある。
ペン書きについては、現在「前橋市神明町五十四横地方学校社」（大妻女子大学図書館蔵本）、「前橋市紅雲町五十六／草野心平」（日本近代文学館所蔵コピー版）の二種類確認。

『銅鑼』の色濃いヒューマニズムと芸術性に批判的でいながら、当時この二つの雑誌（「銅鑼」と「学校」―杉浦註）には協力者の幅が広かった。この前年『バリケード』の編集に萩原、小野、岡本と並んで草野心平が加わったとき、はっきりと大同団結の姿がとられた。『学校』七冊の目次にも、その辺の性格が筆者たちを通じて看取される。（『あるアナキズムの系譜』[注6]）

と説明している。「学校」一・二号は、「銅鑼」創刊以来の草野心平との個人的交流につらなる詩人たちや、前橋出身の

表二

	赤と黒	ダムダム	銅鑼	詩文学	バリケード	宣言	第二	北緯五十度	馬	南方詩人	弾道第一次	文芸市場	矛盾	黒色文芸	黒色戦線第一次	詩神	アナキスト詩集	学校詩集	新興詩人選集
猪狩　満直			○		○		○	○		○	○					○	○	○	
伊藤　信吉							○			○								○	
伊藤　　和								○	○		○		○			○		○	
岩瀬　正雄							○		○	○	○	○			○			○	
大江　満雄						○										○		○	
岡本　　潤	○	○	○		○	○	○		○	○	○	○	○			○	○	○	○
尾形亀之助			○	○		○				○						○		○	○
尾崎　喜八			○		○					○								○	
小野十三郎	○	○	○	○	○	○	○			○	○		○	○	○	○	○	○	○
金井　新作					○		○			○	○		○	○	○	○	○	○	
神谷　　暢			○				○			○						○	○	○	○
草野　心平			○		○	○	○	○	○	○	○			○		○	○	○	○
黄　　瀛			○		○	○	○		○	○						○		○	○
小森　　盛						○	○			○	○					○		○	
坂本　七郎							○	○	○		○					○		○	
坂本　　遼			○	○	○	○				○						○	○	○	○
佐藤　英麿																			
下館リネ子																			
杉山市五郎						○	○		○	○	○			○	○	○		○	
高村光太郎			○							○								○	
竹内てるよ			○			○	○	○	○	○	○			○	○	○	○	○	○
中田忠太郎																			
萩原恭次郎	○	○			○		○			○	○	○		○	○	○		○	○
半谷　三郎																			
広田万寿夫																		○	
碧　　静江			○		○	○					○					○	○	○	
逸見　猶吉																		○	
三野　混沌			○		○											○	○	○	○
森　　佐一			○		○													○	
森　　竹夫							○			○								○	○
山本　和夫						○	○			○								○	
湯川　宗二																			
横地正次郎					○		○			○	○		○				○	○	
吉田　一穂																○		○	○
芳本　優子																			

若い詩人たちに占められているものの、第三号（昭四・一一）に至って、岡本潤、小野小三郎らの、「『赤と黒』から『文芸解放』の時期を潜流して『弾道』に『詩行動』につながる線」（秋山清・同前）の詩人たちの参加によって、人間的にはヒューマニズムの詩人から、農民詩人、アナーキスト詩人まで含んだ、「銅鑼」の寄稿者群に匹敵する広がりを持ち得ている。

この「銅鑼」と匹敵する拡がりを持つ点が、「学校」を、第一次「黒色戦線」（昭4・2～12）「第二」（昭4・1(?)～11）「矛盾」（昭3・7～11）などの同時期のアナーキズム（詩）雑誌と異なる特徴の一つである。もう一つの特徴は評論・エッセイの類をほとんど掲載せず、（第四号・北山癌蔵「ノート」、悪崎昇「学校作品について」、第六号・草野心平「詩集『叛く』」の三篇の評論のみの掲載）詩の掲載に限ろうとしている点である。草野心平は、同時期の詩誌「第二」誌上では、坂本七郎との間に、「生活は詩であるか」否かをめぐって論争し、「詩と詩論」他では、春山行夫との間に、「詩は不可避」か否かをめぐって応酬し、さらに、翌年には「弾道」誌上で「詩の技術」論争を植村諦と間に展開しているのであり、また、カール・サンドバアグ、エドガー・リ・マスターズ等のアメリカプロレタリア詩人に関するエッセイも発表したりしている。他の寄稿者達についても同様で、それぞれ、論争や評論を、同じアナーキズム系雑誌や、当時の新興の詩人の団体「全詩人聯合」の機関誌的傾向のあった「詩神」[注7]に寄せているのである。[注8]それにもかかわらず、学校にはわずか三篇の散文しか載せられなかった」ということは、「ガリ版のせい」（秋山清、同前）ではなく、明確に、草野心平の、〈詩〉以外のものは載せない雑誌を作ろうとした再出発にあたっての編集意図が表れたものであろう。

以上のような点に「学校」を他の雑誌と区別する特徴を見ることができるが、草野心平が再出発にあたって、念頭に描いたのは、あるいは、「第二次」「銅鑼」以前の、ヒューマニスティックな、そしてややアナーキスティックな雰囲気を共有した「銅鑼」だったのかも知れない。それは、「学校」創刊号末尾に付された『銅鑼訳詩集』、「銅鑼社刊行書目」（表三）の人選・内容からと、「学校」の表紙に、広東で「銅鑼」を創刊した際と同じ赤い色[注9]をわざわざ用いている点から想定するのだが、根拠が不足と思われるので思いつきを述べるにとどめる。

表三

銅鑼訳詩集（菊版印刷送料共四拾銭）
一月上旬発行
申込所　前橋市神明町六九　銅鑼社

内容

ヴエルハアレン……高村光太郎訳
トルラア……土方　定一訳
モリス……神谷　暢訳
マルチネ……尾崎　喜八訳
馮乃超……黄　瀛訳
マスターズ……小野十三郎訳
タツキー……坂本　七郎訳
リヴエリー……萩原恭次郎訳
サンドバアグ……草野　心平訳
マツケイ……土方　定一訳
ヴヰルドラック……尾崎　喜八訳
ネスビット……神谷　暢訳
ユトレイ……草野　心平訳
郭抹若……黄　瀛訳
ラッセル……萩原恭次郎訳
ダントン……土方　定一訳
ロマン……尾崎　喜八訳
ヂオヴァニッチ……草野　心平訳

銅鑼社刊行書目

三野混沌著　詩集「百性」「開墾者」（絶版）
手塚　武著　詩集「一社会人の横断面」（絶版）
坂本　遼著　詩集「たんぽぽ」（絶版）
杉山市五郎著　詩集「芋畑の詩」五拾二銭―申込　静岡市外長田村広野　著者宛
草野心平著　詩集「第百階級」一円四銭―残部僅少、銅鑼社宛
マルセルマルチネ　詩集「呪はれた時代」（尾崎喜八訳）近刊
エルンスト　トルラア　詩集「朝」（土方定一訳）近刊
カール　サンドバアグ　詩集「煙と鉄」（草野心平訳）近刊
山村暮鳥著　詩劇「海の族」定価五拾銭送料二銭一月下旬発行
高村光太郎著　詩集「猛獣篇」謄写版限定　近刊
黄　瀛著　詩集　中華民国詩抄　近刊

学校　謄写月刊雑誌　百部限定　定価二十銭送料二銭一月下旬発行
頁は百頁にもなり　六頁にもなるだらうことを予想します
前橋市神明町五四　学校社

3　創刊号

創刊号は、現在確認し得た限り二種類存在する。一つは、伊藤信吉『逆流の中の歌』や秋山清『あるアナキズムの系譜』に紹介されているもので、日本近代文学館蔵のコピー版もこの種類である。本文・奥付のあとに、二頁の『銅鑼訳詩集』「銅鑼社刊行書目」、及び、「『学校』騰写月刊詩雑誌　百部限定　定価二十銭送料二銭　頁は百頁にもなり　六頁にもなるだらうことを予想します／前橋市神明町五四　学校社」の広告がある。これが、完全なものであろう。もう一種は、大妻女子大学図書館蔵の版であるが、表紙の色、木版の字、いずれも、前出の草野心平の回想（『わが青春の記』）に書かれたものに合致するが、二頁の広告頁が存在せず、（大妻本に破棄された跡はない）、内表紙の「創刊号」が騰写印刷ではなく毛筆で手書きされている点のみが先のものとは異なる。本文に異同はない。おそらく、印刷・製本の際のミスだろうと思われる。

巻頭は、「オラフ　リンドブルーム」。エドガー・リ・マスターズの詩の小野十三郎による翻訳である。この詩はのち弾道叢書の第一冊目として刊行された『アメリカ・プロレタリア詩集』（昭六・一、現在『社会派アンソロジー集成』の一冊として復刻されている）[注10]に収められた。

小野十三郎は、この時期さかんにアメリカのプロレタリアの詩を翻訳・紹介している。そのうちエドガー・リ・マスターズの詩は、「新スプリンヴ」（「黒色文芸」昭三・十一）「ウィリアムアルストン」（第一次「黒色戦線」昭四・二）「リラウッド」（「若草」昭四・七）及びこの「オラフリンドブルーム」と四回にわたって、種々の雑誌に訳出され、『アメリカプロレタリア詩集』には十三篇が収められている。小野十三郎は当時を次のように回想している。

わたしたちは、この時代に、エドガー・リ・マスターズの「スプリンバア・アンソロジー」という詩集にもほとんど

同時に着目している。わたしは、外国の詩でも、このようなあまりスマートではない、不器用で、少しばかり通俗で、レトリックや韻の方法を無視した、一見散文に近いごつごつとした文体を持っているアメリカの社会派と目されている詩人の作風から影響を受けた。」（『奇妙な本棚』[注11]）

ここに言う「わたしたち」のひとりである草野心平は、「詩と詩論」第四冊（昭四・六）の特集「世界詩人レヴィウ」のなかで、「エドガー・リイ・マスターズ」を担当執筆している。この詩人への当時の評価が簡潔に記されているので、少し長いがそのその一節を引用する。

「スプーン・リヴァ」は一九一五年に発刊された。これは最もいい（現在でも）リアリズムの詩集の一つであり、当時は世界詩の「新らしい時代」を展開した此詩集の中には二百四十人の人物がゐる。ユダヤ人、瑞西人、イギリス人、支那人等々。そしてこれらの人々は「スプーンリヴァ」（イリノイのハノヴァと仮定されてゐるその仮名都市）の墓の中にゐる。詩集全部が、その墓の中からの一人一人の告白なのである。女中や大統領や会社員やクックや有閑婦人やサギ師や小学校の女教員や、賭博（バク）や強姦や散歩や鉄道や、ライオンやサロンや農場やその他その他。（中略）これは万人の詩集だ。「社民」が一般的であるやうに。そしてそれよりも何よりも表現形式の簡単は一九四〇年にまで生きる程恐ろしく大衆的だ。「誰れにも分る言葉であってそして詩」この単純で六ヶ敷しい問題を彼は解決してゐる。彼は一九一五年に於て世界の詩型をぶち壊した。そしてそれは未だ生きてゐる。彼は抒事詩から抒情や感情や形容や主観を放逐した。放逐することによって始めて抒事の中に抒情を生かした。抒事詩や抒情詩の一つの型をわれわれに示した。読者に感情その他を反射さすために、彼は詩を骨格だけにして見せた。（彼の詩が応々に弾力にとぼしいのは、そのためではなく（骨格云々）その如きもの（弾力云々）の中に彼の詩人が不足してゐたといふことにすぎない。）

この評は、「学校」二号以降にあらわれる「無題」等の草野心平自身の詩法とも通い合うところを持ち、これらの詩人

との出会いが、およぼした影響の大きさを語るものでもある。

（なお、草野心平への影響については、「無題」をとりあげる際に考察する予定なのでここでは指摘するにとどめる。）

さて、「オラフリンドブルーム」は次のような詩である。

オラフ　リンドブルーム

エドガー・リ・マスターズ

ここに俺がゐる　新スプンリヴァの一新聞記者
自由と機会を求めて渡ってきた亜米利加移民の子
俺はつねに俺のやり口を心得てゐた
大向ふにもってこいのジロンド党の主義主張を唱導し
次第にその発行高を増加し
発行高に応じて広告欄の価格をひきあげた
表面租税問題の如き温健な改革を提案しながら
蔭にまわって（ママ）は自分の税金をごまかした世の悪風、並びに犯罪
　者と手を交へながら
俺自身は土地盗棒の仲間入りをした
電信網を独占しては
記事を書いたり売ったりして歴史を贋造した
俺と俺一族を除いた同業者の自由出版に対抗し
金持共の指導者となり
労働組合の敵をもって自ら任じ
やつらを牢獄にぶちこんだり殺害したりした
老獪極まる法律擁護者
公開のサロンや賭博場には反対しながら
秘密の地下室、銀行の裏部屋の勝手はよく知ってゐる
姿を見せない　尻尾を出さない
金銭に関しては飽くまで貧欠な
キリスト教紳士
新時代の一編輯者

小野十三郎訳

オラフ・リンドブルームという架空の人物が、新聞資本を牛耳る資本家として成功していく過程でとった老獪な「やり口」を回顧している。決して表面立って活動せず、表面的には、法律擁護者、民衆の味方の仮面をつけて、裏で法律に触れずに私欲を満たしていくといった手口を、誇らしげに「オラフリンドローム」が語る。老獪な手口の回顧にはリアリティがあり、紳士然とした資本家の欺瞞への怒りを読み手に喚起させることになる。当時多かった、労働者や虐げられた者の立場から、資本（家）を告発したり、怒りを絶叫したりするスタイルの詩のような直接の感情表白はなく、客観的叙述

を装いながら〈敵〉の内側から暴いていこうとする方法に新しさがあった。小野十三郎は、「翻訳などというものではなかった。だれかの詩を訳しているというよりも、それによって自分の詩を書いているのだという気持が強かった。」(『奇妙な本棚』)と回想しているが、小野十三郎ののちのリアリズムの詩の基盤が形成されるひとつの要素にこれらの詩の翻訳はなり得たであろう。

次に載せられているのは、横地正次郎の「星」である。

星

横地正次郎

冬を見た
やがて萌え出てくるものがぢんぢんと凍りつく夜を見た
天体の星屑の密集には離れ去る友情が熱い
君は無言で別れてゆく
断層の塊雲にさへぎられた陽鳥(ママ)もゐない河原に出て
雲を見たつけ
遠い裏山脈の空の接触から落葉したアカシアの林まで
風はつめたく流れてきた
君の肩と俺の耳だ

転々と轟々と生活に飜へる一つの旗

君の手は何を握って怒ってゐる
君の眼は何を凝視して慄へてゐる
生きてゆけ!
力を満身にかりあつめ俺の夢の朽ちない処
確信と愛との結ばれる処
俺が生命が旗が心臓が兄弟が喜びがつながる処
寒さに耐へ(ママ)た肉体はゆけ!
手を振って淋しい涙を蹴ちらしてゆけ!
君が俺でなくなる日
俺が彼女でなくなる日
だから君
冬がはじまる新らしい記憶を指すものを死といふな
元気だったら手紙を書くことだ

伊藤信吉は「学校」創刊前後の横地正次郎について次のように回想している。

おなじ土地にそだっていっしょに『学校』の仕事をし、また同年代の詩人として私を刺戟した横地正次郎は、そのころすでに文学的アナーキズムのグループで注目されていた。自由や放埒というべきものを身につけ、するどい感覚的

な詩を作っていた。私が『学校』の編集を手伝うようになったのは第二号からだが、横地正次郎は最初から草野心平と雑誌発刊の企画をした。それだけ成熟した詩を作っていた。草野心平を前橋へ連れてきたのも横地正次郎であり、私を草野心平のところへ連れていったのも横地正次郎だった。詩をめぐって、『学校』を中心にして、私たちははげしく往来した。」(『逆流の中の歌』)

横地正次郎と「学校」発刊の企画をしたと語られる当事者の草野心平は、こう回想している。

(福生館には―杉浦註)井上日召の息子の横地正次郎とこれも詩人の坂本七郎とが連れだってきたりもした。横地と坂本は前橋へ行かないかとしきりにすすめた。上州という言葉の持つ音感がまず私をひきつけた。私たちは前橋へ行くことに決めた。(『わが青春の記』)

草野心平の前橋行きおよび、「学校」の発刊さらにその後の雑誌の実務的方面に横地正次郎の果たした役割は、これらの回想およびさきの表一にみられる横地の「学校」における位置に明確であろう。横地正次郎が、アナーキズム系の詩誌に発表した最初の作品は、昭和二年九月刊の「バリケード」創刊号に掲載された「一人反逆の淋しさよりも」であり、次の作品は第二号掲載の「中流都市的軽蔑」である。そして、次が「学校」創刊号の「星」ということになる。とすれば草野心平と横地正次郎の交流は、草野心平も参加していた「バリケード」から始まったということになろう。伊藤信吉は、「成熟した詩を書いていた」と言い、草野心平も、共に雑誌を創刊したくらいであるから、新進の詩の書き手としてその力量を評価していたのだろうが、たとえば「学校」以前の横地正次郎の詩は次のようなものであった。

九時三四分

酷く単純に肩を張ってあっさりやられて了ったやうだ
一日の終りに疲れと寝台を知った
群集心理なんて言ふまだらっこしい気持が解らない
明日と完全に絶縁することは出来ない
其奴は鉄の中で無意識の中で頑迷にゐるのだ
握手しやう信じられるか
信じられないかどちらでもよかった
お前が泣くのだったら口惜しい
自然と唇が噛み合はさるぢゃないか

お前は泣かない声を出さない笑って喋ってゐた従順さうに
明日は屹度晴れるのだ
性急な恐怖に赫らんだ羞恥よ
烈日に叩きつけられ埃っぽい路で訣別しやう
一瞬の夢にしろ酒にしろ覚悟があったんだ
お前は胸が抱立ってゐる
俺は胸が鈍重につまってむせんで来る

毛布もいらなくなったから眠れるだらう

窓の外は夜が明けてゐたのだ
毛布を捲きあげて身体をまきつけて渋い眼で其奴を視た
病気になったのはお前ぢゃないんだ
俺ぢゃないそいつなんだ
冷へ冷へした風が吹いてゐる
微に頬笑んでゐる円蕊の愛が再び寄ってパチンと離れてゆく

其奴を葬った後の赫土に茫々と草が萠へる[注12]

題の「九時四二分」はおそらく「其奴」の死の時刻であろう。政治運動あるいは闘いのなかで、病に倒れさせられ、死んでいった「其奴」の死と葬いの前後の時間が混在し、説明を省略して、性急に心情的に「お前」に語りかける言葉が並んでいるため、わかりにくい詩となっている。しかし、たたみかけるようにつらなる心情表現と、比喩表現、最後の空しい死を暗示する情景描写の一行などが、詩としての実質を形作っているように思われる。

先の、「星」は、二連からなる。第二連の「力を満身にかりあつめ俺の夢の朽ちない処／確信と愛との結ばれる処／俺が生命が旗が心臓が兄弟が喜びがつながる処」を共に求めようという友への連帯の呼びかけは、他の絶叫的なアナキズム系の詩にも見られるものであり、常套的なものである。しかし、一連に見られる感覚的表現は、他のアナ系の詩にはほとんどみられない鋭さとロマンチシズムへの傾きがあり、それこそが横地正次郎の個性を示すものとなっている。

黄瀛は、「銅鑼」の創刊以来の同人であったが、「銅鑼」のアナキズムへの傾斜につれて、作品をほとんど寄稿しなくなっていた。[注11] その後、草野心平が〈文学性〉の強い詩誌「学校」を創刊するにあたって、再び参加することになったと見られる。全七号のうち、四号に長い詩を寄稿している。

創刊号に寄せたのは「将軍よ！」である。近衛連隊入隊などの軍人体験が[注13]、このような題材の詩を書かせることになったと思われる。時代の推移にとり残されているのを自覚せず、過去の栄光と旧来の作戦に固執するゆえに、更なる国の危機を招き、若い勢力に見離されようとする将軍へ語りかけるスタイルの詩であり、新旧世代の交替を描き、旧世代のもたらす悪弊の告発に主題がある。

この詩はのちに『学校詩集』（昭四・十二）[注14]に収められ、さらに黄瀛自身の第二詩集『瑞枝』（昭九・五）[注15]に収められた。『学校詩集』に収められるに際してわずかの手入れがされているので、以下、「学校」初出本文を紹介しておく。

将軍よ！

黄　瀛

将軍よ！
今時おのれを信じすぎる陳腐漢よ
君の手兵五万はもう去勢されて進む力がない
進軍喇叭が天にひびくからと言って
君は北叟笑んで野戦司令部に納まってゐるのはをかしい！

将軍よ！最早兵は君のために疲れた！
彼等の意志がやす〳〵と君の号令に動くと思ふのはまちがひだ
かつては生命がもろく散るのを喜んだ君だったが
今信念のために倒れるものの強さに君はおびへてゐるね
血なまぐさい戦場の風が肥満した君の横っ面をなぐる時
将軍よ　そのべん〳〵たる腹の一角に自分を忘れていいんだ
夕ぐれ砂けぶりを立てて立てつづけに来る状況報告の伝騎に
君は悲しい表情で歯ぎしりしながら参謀達のために机を叩くと
か
それもいいだらう。末路といふ一幕物には……
そしてその芝居に君はあまりにもムキで熱心だとか
猪のやうな首をかしげて昔を考へるとか
将軍よ　今は本当に君のためにイヤな時だと八字髯をつまむだらう？
君の野心が君自身を痛め
君のあどけない兵にまでのびて行くのは明らかだがね？
見給へ　最早君のよき民衆の声を探すにはむづかしい時だ！
まわりすべて君の新しい敵が一ぱい満ちた！
君達よりも光熱に燃え輝やく勇敢な闘士達！
それに対へる君の軍隊の力は？

将軍よ！君の他力本念はまだ解けないね
君の背後の黒い影、そいつが心強いマスコットだって?!
笑ひ事ぢゃない、あんなものが…

あれは俗に言ふ「狼の牙」
君の国を忘れた心があいつらを迎へた！誘導したのだ！
あいつらの本心ー将軍よ、恐しい君の嘆息だね
砲声殷々だからと言って死より以上の恐しさはない筈だ！
若者達には実際のところ閣下を透して見へるものがある！
昔は一々服従の我々の国だった
だが今時強権の前に立ちすくむやうな若僧は一寸珍らしい
君は知ってるだらう？我々の手が鎖になったのを…
君は我々に捨てられると思ふから却て動けまい
国が君を追放する時！と知ったら悲しいだらう
猪首が温泉地方向を指す磁針になってしまへば簡単でいいが
将軍よ！明日こそ北方に一台の飛行機が消へる時だ？
あの何も知らない君の半滅された魂のない兵隊！
君は今身ぶるひをしてゐるね！
無茶な・かつての英雄よ！猪首の大将よ！
昔のやうに威風堂々と戦場で見えたくはないかね——

草野心平が創刊号に書いたのは「血の話」である。

血の話
血ヘドがでたといふことは
血が口から出たといふことだ
痔血が出るといふことは
血が肛門から出るといふことだ
余分な血が出ると思へば
笑ひごとにもなるだらうことだ
おれとおまへと
口とケツから——
だんだん血に仲よしになるといふことは
仲よしになるといふことぢゃないか
童話でも話そうぢゃないか
大胞の音をきいたことがあるか
大胞はドドーンとなるのだ

この詩はのちに『学校詩集』に収められ、その後さらに、草野心平の実質的第二詩集『明日は天気だ』（昭六・九）[注16]に収められた。その際に、二行ずつを一行にまとめ（「血ヘドがでたといふことは血が口からでたといふことだ」のように）、末尾の三行を、「世界中にこんなカップルがうんとこさあるだらうことは力ぢゃないか」に変更している。一読してわかる通りこの詩には、「ぢゃないか」が繰り返し用いられているが、これは高村光太郎の「ぼろぼろな陀鳥」[注17]の語法を模倣したものである。伊藤信吉の回想によれば、当時の前橋に集った詩人達の流行だったようだ。

昭和三年末か四年はじめの冬のこと、私は酔っぱらった草野心平や小野十三郎やそのほかの人たちと、夜ふけの前橋

の街をもつれあってあるいていた。ぐだぐだしたその酔っぱらいたちのからみあいの中から、そのとき小野十三郎が「よせよ、それ。ないじゃないかなんて。」といった。誰かがそんなしゃべり方をしたのだ。それは高村光太郎の「ぼろぼろな陀鳥」「上州川古さくさん風景」などの詩に「ないぢゃないか」という特徴的な語法がたくさん出てくることに関連していた。（中略）それが私たちの会話にもぐりこんだわけで、高村光太郎の詩精神や語法ともいうべきものは、地方都市前橋の冬の寒さの中にまで持ちこまれていたのである。（『逆流の中の歌』）

伊藤信吉が、語法のみでなく詩精神も前橋に持ち込まれていたと言う通り、この詩にあらわされる身体的な負を正の方向へ転化してしまおうという精神の姿勢は、高村光太郎の詩に見られる精神に通ずるものがあろう。

「銅鑼」に猛獣篇を寄稿し、前に見たように語法ばかりか、詩精神においても草野心平たちに大きな影響を与えていた高村光太郎は、「興」を寄せている。

興　　高村光太郎

蹉跌は證（あかし）だ。
真なるものは必ず蹉跌す。
蹉跌の深みに転落せぬもの、
已（ママ）はそいつの友ではない。
君見たまへ此のおもちゃ屋の
葉巻の灰は崩壊しない。
サンタクロオスにもらふなら、
ほんとに火のつくハヴァナがいいな。

この詩はのちに『現代日本詩集』（昭四・四）[注18]に収録されるが、句読点一箇所の変更のみで本文の異同はない。

前半において断言のスタイルで、真なるものを求めての蹉跌を潔しとする高邁・超俗の精神が語られ、後半で、それを君に具体的に比喩的に示すという構成をとっており、アナキズム系の絶叫調の詩が多くとる、客観的描写に、それから発する怒り・反抗の心情・叫びが続く構成と対照的になっている。

これまで見てきた、創刊号の詩は、小野十三郎の訳詩を除き、一様に、「君」「おまへ」などの対象に呼びかけるスタイルをとっている。対象に対する連帯意識の有無など、対象に対する意識の点では、それぞれの詩に差があるものの、このようなスタイルの詩が並んだところにこの号の特色のひとつを見ることができよう。これが偶然なのか、それとも、「学校」という〈場〉へのなんらかの共通の理念に発するものなのか、早急に結論は出せない。二号以下の作品の検討をもふまえて、今後に検討すべき課題としておく。

注1　「『銅鑼』復刻版解説」昭五三・三　日本近代文学館

注2　昭四十・六、オリオン社。ここでは『草野心平全集』第九巻（昭五六・七、筑摩書房）に拠った。

注3　『詩と詩人』（昭二九・六、和光社）所収、初出未確認。ここでは『草野心平全集』第五巻（昭五六・五）に拠った。

注4　草野心平自身が「銅鑼」の「アナキスチックな傾向」に無縁でなかったことはたとえば、第十号に掲載されている「淫売婦―十二部よりなる長詩の第一部」の次のような一節から容易にうかがえる。

ドン底には底があった　無かった
喇叭管の中に現在・未来への悲痛なる叫喚がある
立て！
彼等を脈打ってゐる盲目な必然
彼等は赤と黒の交響にまで彼等自身を殺□してしまった

しかし、また、拾参号（昭三・一）では、表紙には「エマ・ゴルドマンは何を見たか(詩)」といういかにもアナーキズム詩を予想させる題名が載せられているが、実際には、掲載されず、本文には代りに「蛙・殺虐の恐怖のない平凡なひと時の千組の中の一組」が載せられている。この詩は二段組の下段に掲載され上段は空白である。表紙のような詩の掲載予定で一頁分とっておいたところに、アナーキスチックな詩がうまく書けず代りに蛙の詩を書いて掲載したということも想像される。次のような詩である。

そうか？
おれもそだ
黙ってると

どてつ腹むしりたくなってくる
このお天気はどうだい！
お天気はお天気にして出掛べや
あいらもうれしいんでやけに鳴いてるな
んぐべ
あ　んぐべ
唄ひながらんぐべ
どったどった音たててんぐべ
馬鹿！　なに笑ってるだ
ゲッヘ　おまへも笑ってるくせに
んぐべッ！

本稿では、雑誌への寄稿数や編集スタイルの相違など、いわば外側から、草野心平の異和を探ったが、ここにあげたような作品の幅を、綿密に跡付ければその「ジッグザッグ」の様相が明らかになり、外側からの考察はより補強されるはずである。

注5　『わが青春の記』「放浪時代　結婚と煙突掃除屋」

注6　昭四八・六　筑摩書房

注7　全詩人連合は「全詩人連合」という機関誌を刊行したが、創刊号（昭三・四）一冊のみで途絶した。

注8　坂本七郎「手紙―猪狩満直君におくる」（「第二」七号、昭四・九）猪狩満直「僕のノートより（君へおくる手紙の代りに）」（同前）岡本潤「坂本七郎への通信として」（同前）神谷暢「ぼく達は戦ふ」（「第二」八号、昭四・十一）小森盛「詩における技巧―岡本潤・その他へ」（同前）小野十三郎「文芸時評プロレタリア詩について」（第一次「黒色戦線」五号、昭四・八）小野十三郎「文芸時評プロレタリア短歌運動を批判する」（同前、六号、昭四・一〇）黄瀛「詩集『第百階級』について」（「詩神」昭四・一月号）小野十三郎「断片的抜書」（同前、昭四・六月号）岡本潤「詩を生理的に見る」（同前、昭四・八月号）など。

注9　「表紙だけは春聯に使う赤紙に中国の印刷所でやってもらった」（「『銅鑼』に就いての私的回想」）「表紙は七夕紙の赤、私の書いた字を木版にしてそれに墨をつけて押した。」（『わが青春の記』）

注10　昭五八・六、戦旗復刻版刊行会

注11　『奇妙な本棚―詩についての自伝的回想』昭四九・四、立風書房

注12　『アナキスト詩集』（昭四・五）所収。「附記」によれば、「一九二八年の夏の企画」で、四年五月まで発行が遅延したのは印刷の遅れ、経費難のためであったということだから、「学校」創刊以前の執筆と推定した。

注13　黄瀛は、日本の陸軍仕官学校卒業。「銅鑼」十二号（昭二・九）の後記に、「黄君は近衛連隊に入った」との消息が載せられている。

注14　学校詩集発行所刊。現在、麦書房版（昭五六・十二）と、『社会派アンソロジー集成』版（昭五八・六、戦旗復刻版刊行会）の二種類の復刻がある。

注15　ボン書店刊。昭五七・九に、蒼土社より復刻版が刊行されている。

注16　渓文社刊。

注17　初出「銅鑼」第十四号、昭三・三。

注18　改造社版『現代日本文学全集』第三七巻。